

生活圏域サービス事業所 交流会報告

第1弾 「認知症学習会」 2012.6.29

今年度の生活圏域サービス事業所連絡会では、「認知症高齢者を地域やサービス事業所でどう支えていくのか」を主なテーマとし、一年間の交流会を企画しています。まず第1回目は、認知症について学びたいという意見が多く、京都府立洛南病院の森俊夫先生を講師に、6月29日に認知症学習会を開催しました。(参加者 147名)



講義の中で、多くの人が印象に残ったことは「出会いのポイントを前に倒す」ということです。認知症が疑われば、なるべく早期に医療とケアにつながることが重要で、それが遅れると、ご本人の生活が崩れかけているところで、医療やケアが関わることになります。ご本人が自分の生活歴や、意思・希望を語れる段階で多くの専門職が出会えることは非常に重要で、認知症が進行し自分の意思を伝えることが困難になっても、それまでのご本人をよく知っている支援者が、本人の望む生活を具体的にイメージして支援することができるからです。

医療やケアに出会えないこと(狭義)と、出会った後のケアの対応力が及ばない(広義)ことを「入り口問題」と呼んでいます。

「入り口問題」解決のためには、認知症が疑われる方を医療につなげるための流れを作ることが重要です。また、相談を受け付けることが多いかかりつけ医や地域包括、サービス事業所、地域の方々などが、認知症に対する「感度」を上げ、早期に「気付く」ためには、日頃から他職種と連携し情報共有することも必要です。さらに、ケアの対応力向上のためには、「その人のことをよく知ること」と「その人の『疾病』についてよく知ること」が重要ということです。

この「入り口問題」を「大変な人がいるのではなく、大変な時期があるだけ」と、前頭側頭葉変性症の方の事例を挙げられ、疾病によって症状が異なり対応方法も変わることもよくわかりました。

この事例では、診断されサービスと出会えたのは発病から5年が経過しており、もう少し早く出会えていたら、疾病の特性を利用してサービスを定着させることもできた、と森先生は入り口問題を実感されたそうです。

私たちは、利用者さんやそれ以外の地域の人々の相談窓口になりますが、感度を上げ、医療とケアに早期につなげるために今後も積極的に連携への取り組みや学習をすすめていきたいと思います。



第2弾

認知症高齢者をどう支えていくのか

2012.8.31

平成24年度 第4回 生活圏域サービス事業所世話人会主催の年間テーマである「認知症高齢者への入り口問題」をケアマネジャーの立場から事例を通して情報を共有できるのではと、平成24年8月31日(金)、18:00～19:30西賀茂会館で、居宅サービス事業所が事例検討学習会を開催しました。(参加者 88名)

当日は、事例に関わって下さった主治医も参加しパワーポイントを使用して事例を発表しました。テーマの狙いとしては、ケアマネジャーはどのような支援をすれば良いか悩みがおおきかったのですが、もともと警察官という職歴にそった対応をすることで大きな問題とならずに落ち着いてきたケースです。



事例発表後、関わってくださっていた主治医からも「あの時、もう少しこうしていれば」という悩みをお聞きして、その率直な言葉に一同胸を打たれました。一つの事例を通して、地域の中で各サービス事業所・主治医等と連携がとれる環境にある幸せを感じる事が出来ました。

又、認知症家族の会・原田氏より事例を聞いて、今は好々爺でとてもいい状態となっていると報告を受けてうれしく思いました。それは、介護サービスが適切に対応されていたと思います。自分の母も大変な時期があったがその時期が過ぎると、問題行動はパタッとなくなりました。

本当に大変な時期は、認知症の中の一時期です。その時期をどう乗り切るかが大切です。介護サービスを提供される皆さんのが情報を共有しあい、サービス提供者間でネットワークをつくることで、利用者の状態が作れると思います。

認知症の人を支えるポイントは、「寄り添う・情報の共有」をお互いにしながら一貫できるケアをやれることです。

事例発表で良いと思ったのは、徘徊を問題行動として捉えず、安心して歩いてもらえる環境整備をされたこと。地域での認知症センター講座などを通じて理解を深め、専門職はさまざまな機会で専門職として向上を行って欲しい。